

以下の駄文に登場すると思しき方々、全く悪意はございませんので、何とぞご了承ください<m(__)m>。

私は二ヶ月に一回、給料日のあとに散髪に行くことにしている。短く刈った髪の毛がのびてうっとおしくなるのが大体二ヶ月くらいなのだが、第一に散髪代を浮かしている。

今月五月は散髪ので、22日の朝、山口市内の行きつけの散髪屋Hさんに予約を入れると23日午前中ならあいているというので、お休みをいただいて行くことに。

22日出勤すると事務のAさんから電話。テレビのY局が学生Bさんの取材をしていて、明日23日の4限目、Bさんが私の中国語の授業を受けている姿を撮影したい、委細は23日の午前中に連絡します、と。私は理由は告げず、午前中はお休みをいただきましたので、メールで連絡くださいと言って了承し電話を切った。

受話器を置いたあと、何か心にひかかりが、、、その正体が明らかになった。散髪したあとテレビ撮影、あきらかに映るのを意識して、散髪をしてきたかのように見られても当然だ。いやちゃうねんって、散髪予約したあと、テレビ撮影が入ったんや。それも、私への取材（これはあり得ない）ならともかく、学生のドキュメント。私は映らない可能性が極めて大きい。映してくれとばかりの自意識過剰の散髪。ああ。。。。

私の苦悩がはじまった。やはり散髪の予約を取り消そうか、それも腕のよいお店で予約が取りにくいのもったいない、いやそれ以上に、二ヶ月ごとの給料日のあとの散髪日、この人生の規律を破ることはできない。テレビの撮影もキャンセルできまい。身をさくような激しい苦悶の末、番組の主人公はBさんだ、誰も私のことなど気にはするまいと決心して散髪に行くことにした。

当日、なるべく散髪したことが取材直前までばれないように事務の人に会わないようにこっそり裏口から大学棟に入ると、ばったり、気配りが大学でナンバーワンの女性Cさん、あら先生、髪の毛さっぱりされましたね。いやちゃうんです、散髪を予約したあと、取材が入ったんですと言いかけたが、Cさんは事情を知らないはずだと、はい、ありがとうございますとだけ挨拶を返した。

そして、いよいよその時が来た。事務のAさんが取材クルーを連れて教室に入ってくる。私の整った髪を見て、先生、取材のために散髪しましたねと、半笑いのように見えた。いやちゃうんです、散髪を予約したあと、取材が入ったんです。挨拶に来たアナウンサーさんは、整った私の髪型を見て、笑いをこらえているようだ。あなたを映しにきたのではない。後方に控えたカメラさん、音声さんも、笑いをこらえて肩をゆらせているようだ。いやちゃうんです、散髪を予約したあと、取材が入ったんです。受講生達は、突然の取材に驚きながらも、散髪したことが一目瞭然の私を見て、あきれた表情を浮かべているようだ。主人公のBさんも、私の取材なのに、この先生、何勘違いしてるのかしら、という表情をしているように感じられる（注：Bさんは、たいへん素晴らしい学生です。ですから取材がきたのです）。いやちゃうんや、散髪を予約したあと、取材が入ったんや。

中国語の授業を始める。カメラが回り出す。散髪の葛藤で気が遠くなる。立て直そうと、「アニハセヨ。」だだすべりだ。CDの電源が入らない。コンセントが抜けている。頭は

真っ白だ。取材はすぐ終わると言い聞かせて、なんとか本題に。しかしいっこうにクルーの皆さんが帰らない。私は普段以上に何を言っているかわからない。中国語を教えたのかも疑わしい。永遠の時間が流れた（あとで時計を見ると取材は半時間不足だった）。いつにもまして終始狼狽していた私に対し、Bさんをはじめとした学生達の普段通りの落ち着いた態度の素晴らしかったこと。学生達の適応力をあらためて確信したひとときであった。